

《原著論文》

# 女子大学生における居場所感覚の基底にある 心理学的機軸の探索 (Ⅱ)

——大学入学初期の過剰適応傾向の影響——

The Exploration of Psychological Mechanism Underlying “Ibasyo”  
Feeling in Female Undergraduates (Ⅱ) :  
Effects of over-adaptation immediately after college admission

湯之上 葵 諸井 克英\*  
(Aoi YUNOUE) (Katsuhide MOROI)

**Abstract** : The present study explored the effects of over-adaptation immediately after college admission. Female undergraduates reminisced about their own feelings and behaviors immediately after college admission. Over-Adaptation Scale (Ishizu & Ambo, 2008 ; Moroi *et al.*, 2015) was revised to measure the reminisced state immediately after college admission. In addition to this scale, “Ibasyo” Feeling Scale (Kishi & Moroi, 2011) and Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1979) were administered to female undergraduates ( $N = 286$ ). By the factor analysis (likelihood method with promax rotations), four factors for Over-Adaptation Scale were extracted, though those factors were a little different from those found by the previous studies. According to the covariance structure analysis, over-adaptation deteriorated positive feeling for “Ibasyo” and self-esteem, and positive feeling for “Ibasyo” heightened self-esteem. The significance of research in psychological mechanism underlying “Ibasyo” feeling was discussed.

**Key words** : “Ibasyo” feeling, over-adaptation, self-esteem

## Ⅰ. 問題

諸井・坂上・野島・岡本 (2015) は、女子大学生を対象として、大学における居場所感覚の形成・維持が過剰適応傾向や心理的健康 (抑うつ傾向, 自尊心) とどのような関わりをもつかを検討した。①「過剰適応傾向⇒居場所感覚・心理的健康」と②「居場所感覚⇒心理的健康」という影響経路を仮定した共分散構造分析によって、次のことが明らかになった。①については、過剰適

応傾向は、肯定的な居場所感覚や心理的健康に対して負の影響を示した。②に関しては、肯定的な居場所感覚の形成が心理的健康を維持・高揚につながっていた。

ところで、中学生を対象とした石津・安保 (2008) の研究では、内的側面での過剰適応傾向は学校適応感を損ねているのに、外的側面での過剰適応傾向は学校適応感を促進していた。つまり、諸井ら (2015) の結果と異なり、過剰適応傾向 2 側面の弁別的働きが見られた。ところで、大学新入生などが直面する大学という新たな環境場面への適応時期では (諸井, 1986; 1991 参照), 外的側面での過剰適応傾向が有益な効果を発揮する可能性がある。つまり、Leary & Baumeister (2000) が提唱した

生活デザイン専攻 2014 年度修了生  
\*同志社女子大学生生活科学部

ソシオメーター（Sociometer）理論に基づくと、自分が他者から受容・拒絶されているかに関する主観的指標である自尊心は、新たな対人関係の構築という課題に直面する初期適応時には曖昧になりがちである。このために、自尊心高揚をもたらす肯定的な居場所感覚の形成のために過剰適応傾向がより活性化することになる。

本研究では、諸井ら（2015）による知見を踏まえ、大学入学初期に生起する過剰適応傾向がその後の大学生活における居場所感覚の形成や自尊心の維持・高揚にどのような役割をはたすかを実証的に明らかにする。このために、以下の仮説を設けた。

**仮説Ⅰ-a：**大学入学初期に過剰適応傾向が活発であると、その後の居場所感覚の形成や自尊心の維持に肯定的影響を与えるであろう。

**仮説Ⅰ-b：**大学後に居場所感覚の肯定的形成が行われると、自尊心の維持に肯定的影響を与えるであろう。

ところで、本研究で対象とした同志社女子大学は、今出川キャンパスと京田辺キャンパスの2キャンパスで構成されている。キャンパス立地条件については、今出川キャンパスは京都市の御所近くに位置する都心型立地といえる。他方、京田辺キャンパスは京都府南部にあるが、近鉄京都線とJR学研線が交差する位置にあり、京都府、大阪府、および奈良県のいずれにも接している。京田辺キャンパスの校地面積（130,993.07 m<sup>2</sup>）のほうが今出川キャンパス（23,975.23 m<sup>2</sup>）よりもかなり広い。また、2学部4学科から構成される今出川キャンパスの在籍学生数は2,341名（2014年5月現在）、3学部6学科から成る京田辺のほうは4,140名である。したがって、今出川キャンパスは都市型小規模キャンパス、京田辺キャンパスは郊外型中規模キャンパスといえよう（ただし、例えば梅花女子大学の在籍学生数は1,560名（2014年5月現在）であることから今出川キャンパスが全国的観点から小規模とは必ずしもいえないが、ここでは同志社女子大学内の比較による）。

諸井ら（2015）はキャンパスの効果を検討したが、京田辺キャンパスのほうで過剰適応傾向の「期待に添う努力」が喚起される傾向があったものの、他の側面ではキャンパスの効果を認めることはできなかった。そのため、諸井らは、所属キャンパスの効果が全体的には現れなかったと結論した。大学入学時の過剰適応傾向の役割を中心とした本研究では、このことについて再度検討する。

この2キャンパスの差異に基づいて入学時の初期適応とその影響について推測すると、規模の小さい今出川キ

ャンパスでは、入学当初の仲間づくりが「未知の他者」の割合を急激に減少できるために、早期に親密なネットワークを形成でき過剰適応を繰り返さずに済むと予想される。他方、京田辺キャンパスでは在籍学生規模が大きいため、仲間づくりをしても「未知の他者」の割合に変化はあまり生じない。そのために、さらに親密なネットワークを形成するために過剰適応を反復することになる。以上のことから、今出川キャンパスでは大学入学時の過剰適応の程度が低くなると予測できよう。

**仮説Ⅱ-a：**大学1年次の初期過剰適応傾向は、京田辺キャンパスよりも今出川キャンパスのほうで低いだろう。

次に、初期適応をほぼ終えた時点で見なすことができる2年次以上の段階で、大学における居場所感覚や自尊心にどのように2キャンパス間に差異が生じるかを予想しよう。多くの人と親密な関係にあると感じやすい今出川キャンパスでは、大学が自分にとって肯定的な居場所となり、自尊心も高揚するであろう。他方、「未知の他者」が多い京田辺キャンパスでは、肯定的な居場所感覚を抱きにくく、その結果、自尊心も高揚しないだろう。

**仮説Ⅱ-b：**調査時点（2年生以上）での大学での居場所感覚は、京田辺キャンパスよりも今出川キャンパスのほうで肯定的であろう。

**仮説Ⅱ-c：**調査時点（2年生以上）での自尊心は、京田辺キャンパスよりも今出川キャンパスのほうで高いだろう。

本研究では、以上のような2キャンパスの差異がもたらす影響についても付加的に検討する。

## Ⅱ. 方法

### 調査対象および調査の実施

同志社女子大学における社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した（2013年6月6・24日）。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者（25歳以上）を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生286名を分析対象とした（2年生164名、3年生106名、4年生16名／キャンパス別内訳／今出川キャンパス138名：2年生62名、3年生66名、4年生10名／京田辺キャンパス148名：2年生102名、3年生40名、4年生6名）。回答者の平均年齢は19.82歳（SD = .85, 19～23歳）であった。

### 質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本属性に加え、①大学1年次初

期における過剰適応傾向尺度, ②現時点での大学における居場所感覚尺度, および③現時点での自尊心尺度から構成されている。

### (1) 大学1年次初期における過剰適応傾向尺度

大学入学時に大学生活の中で感じていた気持ちや行動について測定するため, 被験者に大学1年生の4~5月頃のことを回顧させ回答を求めた。

この目的のために, 石津・安保(2008)の過剰適応尺度を利用した。彼らは, 過剰適応傾向を「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり, 内的な欲求を無理に抑圧してでも, 外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」(石津・安保, 2008)と定義し, 32項目から成る尺度を作成した。確認的因子分析によれば, 「他者配慮」, 「期待に添う努力」, 「人からよく思われたい欲求」, 「自己抑制」, 「自己不全感」の5因子からこの尺度が構成される。諸井ら(2015)は, 項目内容が自尊心尺度項目と重なっているために「自己不全感」該当項目を除外し, 「自己抑制」のうち1項目(「自分自身が思っていることは, 外に出さない」)は意図的色彩が強いので除去し, 残りの26項目を女子大学生に実施した。その結果, 石津・安保(2008)の5側面のうち「自己不全感」を除く側面を確認した。

本研究では, 大学2年生以上の学生に対し, 大学入学時(1年生の4~5月頃)の過剰適応の様子を回顧させた。このために, 諸井ら(2015)で用いた26項目を対象に大学入学時に場面を限定した過去形の項目に修正した(表1-a, 付表2参照; たとえば, 「つらいことがあっても我慢する」を「大学にいるときには, 私は, つらいことがあっても我慢した」改変した)。大学1年生の4~5月頃に被験者自身が大学生活の中で感じていた気持ちを回顧させ, それぞれがあてはまる程度を4件法で評定させた(「4. かなりあてはまる」, 「3. どちらかといえばあてはまる」, 「2. どちらかといえばあてはまらない」, 「1. ほとんどあてはまらない」)。

### (2) 現時点での大学における居場所感覚尺度

回答者が現時点の大学生活の中で抱えている居場所感覚について測定した。岸・諸井(2011)は, 「特定の生活領域に対する態度や感情全体」を居場所感覚と定義し, 回答者が通う大学での居場所感覚と家庭での居場所感覚とを測定する尺度(各60項目)を先行諸研究に基づき作成した。本研究では, 大学における居場所感覚尺度をそのまま利用した(項目番号は諸井ら(2015)と同じ)。この尺度は, 因子分析により大学における居場所感覚の5側面(「被受容感」, 「精神的安定感」, 「自己疎

外感」, 「自己没入感」, 「自己有用感」)から構成される(岸・諸井, 2012)。

60項目それぞれについて, 「この6ヵ月間」の大学における自分自身の様子を思い浮かべさせ, それぞれがあてはまる程度を4件法で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

### (3) 現時点での自尊心尺度

Rosenberg(1979)の自尊心尺度を用いて(諸井, 1995), 自分に対する全体的な肯定的評価の程度を測定した(項目番号は諸井ら(2015)と同じ)。10項目それぞれについて, 「この6ヵ月」という基準で回答者にあてはまる程度を4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお, 以上の3尺度それぞれでの評定順の効果を次のようにして相殺した。現時点での自尊心尺度では1頁の前半と後半で項目を入れ替えた2種類の質問紙を用意した。他の2尺度では尺度ごとに評定用紙を頁単位(大学1年次初期における過剰適応傾向尺度3頁; 現時点での大学における居場所感覚尺度6頁)で無作為に並び替えた。

## Ⅲ. 結果

### 各尺度の検討

#### (1) 分析の手続き

各尺度について, まず尺度項目ごとに平均値の偏り( $1.5 < m < 3.5$ )と標準偏差値( $SD \geq .60$ )のチェックを行い, 不適切な項目を除去した。次に, 多次元尺度と仮定されている大学1年次初期における過剰適応傾向尺度と現時点での大学における居場所感覚尺度については, 因子分析(最尤法, プロマックス回転( $k=3$ ))によって次のように検討した。初期因子固有値 $\geq 1.00$ を満たす解をすべて求め, プロマックス回転後の負荷量 $|.40|$ を基準に解釈可能な因子解を同定した。その際, ①特定因子の負荷量が十分に大きく(絶対値 $\geq .40$ ), ②他因子への負荷が小さい(絶対値 $< .40$ )という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い, 明確な負荷量パターンが得られるまで, このことを反復した。最終的に, 因子負荷量に基づき下位尺度項目を選別し, 信頼性チェックを行った上で構成項目平均値を下位尺度得点とした。

単次元尺度と仮定されている自尊心尺度では, 得点が高いほど尊心が高くなるように得点を調整し, 主成分分析での未回転第I主成分負荷量(絶対値 $\geq .40$ )を基準に不適切な項目を除去した。最終的に項目-全体相関

女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索（Ⅱ）

表 1-a 大学 1 年次初期における過剰適応傾向尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果— 回転後の因子負荷量—

当該因子負荷量		当該因子負荷量	
[Ⅰ. 忍耐・自己抑制] [ $\alpha=.89, r=.50-.71$ ] [ $m=2.68, SD=0.61$ ] [ $\tau=1.37, p=.046$ ]	[Ⅲ. 同輩からの期待] [ $\alpha=.83, r=.56-.70$ ] [ $m=2.40, SD=0.63$ ] [ $\tau=1.47, p=.034$ ]		
over_a_8 大学に来ると、私は、自分が思っていることを口に出さ 自 .86	over_b_2 大学にいるときには、私は、まわりの人からの期待を敏 期 .87		
ないようにした。	感に感じていた。		
over_b_4 大学の中では、私は、心の中で思っていることをまわり 自 .84	over_b_1 大学にいるときには、私は、まわりの人たちが自分にし 他 .76		
の人に伝えることが多かった。	て欲しいことは何かと考えた。		
over_a_4 私は、大学に来ると自分の気持ちを抑えてしまうほうだった。 自 .79	over_c_1 大学の中では、私は、まわりの人たちからの要求に敏感 他 .43		
over_b_8 大学の中では、私は、自分が考えていることをすぐには 自 .68	なほうだった。		
言わないようにした。	over_b_6 私は、大学で知り合った人たちから褒めてもらえること 期 .42		
over_c_3 大学の中では、私は、相手と違うことを思っている、 自 .66	を考えて行動した。		
それを相手に伝えることが多かった。	over_a_10 私は、大学で知り合った人たちの期待には応えなくては 期 .42		
over_b_5 大学の中では、私は、「自分さえ我慢すればいい」と思う 他 .61	いけないと思った。		
ことが多かった。	[Ⅳ. 権威者からの期待] [ $\alpha=.71, r=.48-.62$ ] [ $m=2.24, SD=0.72$ ] [ $\tau=2.07, p=.001$ ]		
over_b_9 大学にいるときには、私は、辛いことがあっても我慢した。 他 .53	over_c_2 私は、親からの期待に応えるために、大学での成績をあ 期 .82		
over_a_9 私は、大学の中では自分の意見を無理に通すことはしなかった。 自 .47	げるように努力した。		
over_b_10 大学にいるときには、私は、やりたくないことでも無理 他 .45	over_a_6 大学生活では、私は、親からの期待に応えないと、親に 期 .62		
してやることが多かった。	叱られそうで心配になった。		
[Ⅱ. 人からよく思われたい欲求] [ $\alpha=.82, r=.59-.64$ ] [ $m=2.99, SD=0.60$ ] [ $\tau=2.10, p=.001$ ]	over_a_2 大学の中では、私は、同じ授業を受けている人たちから 期 .58		
over_a_7 私は、大学で知り合った人たちから気に入られたいと思った。 人 .80	「能力が低い」と思われないように頑張った。		
over_b_3 私は、大学で知り合った人たちから認めてもらいたいと思った。 人 .72			
over_b_7 大学にいるときには、私は、自分をよく見せたいと思った。 人 .63			
over_c_6 大学に来ると、私は、まわりの人たちの顔色や様子気が 人 .53			
になるほうだった。			
over_a_3 私は、大学で知り合った人たちに嫌われないように行動した。 人 .49			
		Ⅱ	Ⅲ
		Ⅳ	
		Ⅰ	.50
		Ⅱ	*** .48
		Ⅲ	*** .52

N = 286

初期因子固有値 > 1.13 : 初期説明率 59.12%

$\alpha$  : Cronbach の信頼性係数 ; r : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値

$\chi^2_{(10)} = 304.35, p = .001$

石津・安保 (2008) との対応 : Ⅰ. 他者配慮 ; Ⅱ. 期待に沿う努力 ; Ⅲ. 人からよく思われたい欲求 ; Ⅳ. 自己抑制 (「自己不全感」項目は自尊心尺度と重複するので利用していない)

分析と  $\alpha$  係数値により単一次元性を確認し、項目の平均値を尺度得点とした。

(2) 大学 1 年次初期における過剰適応傾向尺度

項目水準の検討によると全項目が適切であった。2~5 因子解が算出可能であったが、明確な解釈が可能であった 4 因子解を採用した (表 1-a)。

第Ⅰ因子は、「自己抑制」6 項目と「他者配慮」3 項目から構成されている。大学生活に対する初期適応時に自分の気持ちや考えを抑え、我慢していたことを表すと考え、「忍耐・自己抑制」と命名した。「人からよく思われたい欲求」の 5 項目から成る第Ⅱ因子は、初期適応時の同輩からの評価が気になることを意味している、「同輩からよく思われたい欲求」と名付けた。「期待に沿う努力」3 項目と「他者配慮」の 2 項目を含む第Ⅲ因子と、「期待に沿う努力」の 3 項目から構成される第Ⅳ因子は、「期待に沿う努力」が分離したことになる。第Ⅲ因子は初期適応に接する同輩からの期待に敏感なることを示している。「同輩からの期待」、第Ⅳ因子は、親や教室場面での期待を意味している、「権威者からの期待」とした。また、当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値も十分であった ( $r = .41 \sim .68$ )。

各下位尺度の検討をした (表 1-a)。*Cronbach* の  $\alpha$  係数値は .71~.89 であり十分であったので、下位尺度項目の平均値を下位尺度得点とした。尺度得点の平均値比較を行うと (反復測定分散分析)、「Ⅱ. 同輩からよく思われたい欲求」Ⅰ. 忍耐・自己抑制Ⅲ. 同輩からの期待Ⅳ. 権威者からの期待」の有意な傾向が認められた ( $F_{(2.60, 741.52)} = 133.85, p = .001, Bonferroni$  の方法 (5% 水準))。

(3) 現時点での大学における居場所感覚尺度

項目水準の検討により不適切であると判断された 1 項目 (uni\_b\_9 大学にいると、私は無視されている感じがする) を除く 59 項目を対象に因子分析を行った。4~6 因子解まで算出可能であったが、先行研究 (岸・諸井, 2011) と同様に、5 因子解が最も明確であった (表 1-b)。因子名もそれぞれ「Ⅰ. 精神的安定感」、「Ⅱ. 自己疎外感」、「Ⅲ. 被受容感」、「Ⅳ. 自己没入感」、「Ⅴ. 自己有用感」と命名した。

各因子の概念に一致しているほど得点が高くなるように調整した上で、各下位尺度の検討をした (表 1-b)。適切な  $\alpha$  係数値 (.86~.95) が示されたので、下位尺度項目の平均値を下位尺度得点とした。得点の平均値比較によって (反復測定分散分析)、「Ⅲ. 被受容感」Ⅳ. 自

表 1-b 現時点での大学における居場所感覚尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転（ $k=3$ ））の結果一回転後の因子負荷量一

当該因子負荷量		当該因子負荷量	
[Ⅰ. 精神的安定感][ $\alpha = .95, r = .53-.83$ ][ $m = 2.65, SD = 0.64$ ][ $z = 1.29, p = .073$ ]			
uni_c_3 大学にいますと、私は安心できる。	精 .88	uni_a_8 大学には、私の悩みを聞いてくれる人がいる。	被 .78
uni_a_5 大学にいますと、私はリラックスできる。	精 .81	uni_e_10 大学には、私のことを気にかけてくれる人がいる。	被 .76
uni_c_9 大学にいますと、私は居心地がいい。	精 .81	uni_e_4 大学には、私と気持ちが通じ合う人がいる。	被 .72
uni_e_1 大学にいますと、私はくつろげる。	精 .79	uni_d_8 大学には、私を受け入れてくれる人がいる。	被 .70
uni_c_7 大学では、ありのままの私を出せる。	精 .73	uni_a_2 大学には、私を本当に理解してくれる人がいる。	被 .61
uni_d_5 大学にいますと、私はほっとできる。	精 .72	uni_b_10 大学には、私を大切にしてくれる人がいる。	被 .59
uni_c_1 大学では、ありのままの私でいられる。	精 .71	uni_b_5 大学には、私の存在を認めてくれる人がいる。	被 .59
uni_e_8 大学にいますと、私は安定した気持ちになる。	精 .70	uni_b_6 大学には、私と同じ考え方や価値観をもっている人がいる。	被 .57
uni_e_7 大学にいますと、私は生き生きとできる。	精 .53	uni_b_4 大学にいますと、誰かと一緒にいることができる。	被 .47
uni_c_10 大学では、私は心から泣いたり笑ったりできる。	精 .46	[Ⅳ. 自己没入感][ $\alpha = .87, r = .59-.68$ ][ $m = 2.66, SD = 0.60$ ][ $z = 1.18, p = .123$ ]	
uni_e_2 大学にいますと、私は自分を見失わないでいられる。	.45	uni_f_3 大学にいても、私には得るものがないような感じがする。*	没 -.81
uni_f_9 大学では、私は自由な感じがする。	.44	uni_b_2 大学では、私は何かに夢中になれる。	没 .74
[Ⅱ. 自己疎外感][ $\alpha = .92, r = .17-.84$ ][ $m = 2.03, SD = 0.59$ ][ $z = 1.08, p = .195$ ]			
uni_d_1 大学には、私の居場所がない感じがする。	疎 .75	uni_f_2 大学にいますと、私はやりがいを感じる。	没 .70
uni_f_1 大学にいますと、私はまごつくことが多い。	疎 .64	uni_d_7 大学にいても、私は何もすることがない。	* 没 -.62
uni_f_5 大学では、私はまわりの人の輪になかなか入れない。	疎 .63	uni_f_7 大学に、私は満足している。	.56
uni_f_10 大学では、私はまわりの人から受け入れられていない気がする。	疎 .62	uni_f_4 大学では、私は自分の好きなことができる。	没 .49
uni_c_2 大学にいますと、私は落ち込みがちになる。	疎 .62	uni_e_9 大学にいても、私は何をしてもよく分からない。	* -.49
uni_c_8 大学にいますと、私はさびしくなる。	疎 .61	[Ⅴ. 自己有用感][ $\alpha = .86, r = .62-.73$ ][ $m = 2.33, SD = 0.59$ ][ $z = 1.51, p = .021$ ]	
uni_a_7 大学にいますと、私は自分だけ孤立している感じがする。	疎 .61	uni_a_9 大学に私がいないと、困る人がいる。	有 .73
uni_d_4 大学では、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえない感じがする。	被 .55	uni_a_3 大学に私がいないと、さびしがる人がいる。	.69
uni_d_2 大学には、いたくないと思う。	.55	uni_c_6 大学では、誰かに役立つことができる。	有 .67
uni_b_3 大学では、私はまわりの人から必要とされていないような気がする。	.51	uni_f_6 大学では、私のことを必要とする人がいる。	有 .62
uni_d_3 大学には、私が役割を背負わされているものがある。	.48	uni_e_5 大学では、私は頼りにされている。	有 .51
uni_f_8 大学にいても、私は自分らしさを出せない。	疎 .43		
		Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ	
		[因子間相関]	
		I	- .56 .64 .57 .48
		II	*** -.57 -.48 -.30
		III	*** .45 .56
		IV	*** .36

N = 286

\*逆転項目

初期因子固有値 > 1.32 ; 初期説明率 63.93%

$\alpha$  : Cronbach の信頼性係数 ; r : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値

$\chi^2_{(75)} = 1281.608, p = .001$

岸・諸井 (2011) との対応 : Ⅰ. 被受容感 ; Ⅱ. 精神的安定感 ; Ⅲ. 自己疎外感 ; Ⅳ. 自己没入感 ; Ⅴ. 自己有用感

己没入感 ≡ Ⅰ. 精神的安定感) Ⅴ. 自己有用感) Ⅱ. 自己疎外感) の有意な傾向が得られた ( $F_{(2.05, 585.06)} = 121.80, p = .001, Bonferroni$  の方法 (5% 水準))。

#### (4) 現時点での自尊心尺度

項目水準の検討では全項目が適切であった。10 項目すべてで項目水準での分析では良好であった。自尊心が高いほど高得点になるように逆転項目 (e\_a\_2, se\_a\_4, se\_a\_5, se\_a\_8, se\_a\_9) の得点の調整を行った。10 項目を対象とした主成分分析での se\_a\_8 の未回転主成分負荷量がかかなり低かった (.11)。そこで、この項目を除く 9 項目を対象にすると、どの項目の負荷量も高かった (> .51 ; 説明率 48.89%)。また、当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値も十分であった ( $r = .41 \sim .68$ )。Cronbach の  $\alpha$  係数も .87 であった。9 項目の平均値を自尊心得点としたが ( $m = 2.38, SD = 0.58$ )、尺度中性点を有意に下回っていた (対応のある  $t$  検定 (対 2.5) :  $t = -3.53, p = .001$ )。また、得点分布

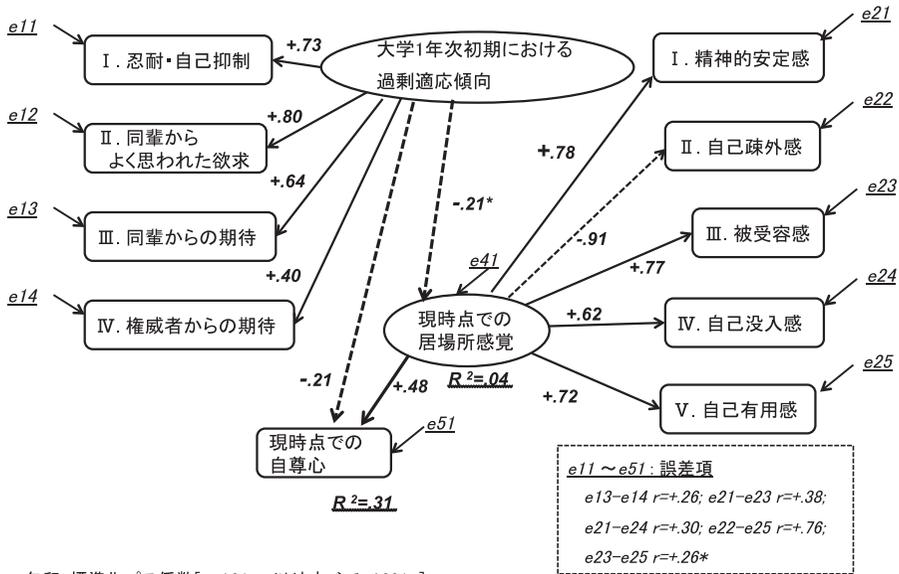
の正規性が認められた ( $z = 1.07, p = .204$ )。

#### 諸測度得点に対するキャンパスと回答者の学年の影響

大学 1 年次初期における過剰適応傾向 4 得点、現時点での大学における居場所感覚 5 得点、および現時点での自尊心得点に対するキャンパスと回答者の学年の影響を検討するために、キャンパス (今出川キャンパス、京田辺キャンパス) × 学年 (2 年生、3 年生) の分散分析を行った。ただし、4 年生については先述したように回答者が少数であったため、本分析からは除外した。

すべての得点でキャンパスの主効果は有意でなかった。したがって、仮説 II-a、II-b、II-c のいずれも棄却された。また、大学 1 年次初期における過剰適応傾向 4 得点と現時点での自尊心得点については、学年の主効果もキャンパス × 学年の交互作用効果も有意でなかった。現時点での大学における居場所感覚 5 得点のうち「Ⅳ. 自己没入感」と「Ⅲ. 被受容感」では次の有意な効果が

女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索 (II)



矢印: 標準化パス係数[\* $p < .01$ ; \*以外すべて $p < .001$ ]

適合度:  $\chi^2_{(28)} = 155.79, p = .001, GFI = .91, AGFI = .82, RMSEA = .13$

図1 大学1年次初期における過剰適応傾向, 現時点での居場所感覚, および現時点での自尊心との関連—共分散構造分析 (Amos 22.0, 最尤推定法) による因果分析 (N=286)—

得られた。「IV. 自己没入感」では有意な学年の主効果があり ( $F_{(1,266)} = 5.66, p = .018$ ), 3年生 ( $m = 2.77, SD = 0.61, N = 106$ ) のほうが2年生 ( $m = 2.60, SD = 0.56, N = 164$ ) よりも高かった。また、「III. 被受容感」では有意な交互作用効果が認められた ( $F_{(1,266)} = 5.08, p = .028$ )。多重比較を行うと (Bonferroni の方法), 3年生では今出川キャンパス ( $m = 3.14, SD = 0.67, N = 66$ ) のほうが京田辺キャンパス ( $m = 2.84, SD = 0.72, N = 40$ ) よりも高かったが ( $p = .013$ ), 2年生 (今出川:  $m = 2.99, SD = 0.52, N = 62$ /京田辺:  $m = 3.04, SD = 0.53, N = 102$ ) の場合には有意差がなかった。

### 大学1年次初期における過剰適応傾向, 現時点での大学における居場所感覚, および現時点での自尊心の関係

「大学1年次初期における過剰適応傾向⇒現時点での大学における居場所感覚⇒現時点での自尊心」の影響図式を検討するために, 共分散構造分析を試みた。なお, 諸測定間のピアソン相関値を付表1に示す。

大学1年次における初期過剰適応傾向, 現時点での大学における居場所感覚, および現時点での自尊心との関連を検討するために共分散構造分析 (Amos 22.0) を行った。潜在変数として {大学1年次における初期過剰適応傾向} と {現時点での大学における居場所感覚} を設定

し, それぞれの下位尺度得点を観測変数とした。また, 現時点での自尊心についてはそのまま観測変数として用いた。影響関係の方向は, 「大学1年次初期過剰適応傾向⇒現時点での大学における居場所感覚・現時点での自尊心」と「現時点での大学における居場所感覚⇒現時点での自尊心」とした。修正指数を参照しながらパスの設定を変え, モデル適合度を改善し, 最終モデルを得た (図1)。なお,  $GFI$  は .90 を上回っているものの,  $AGFI$  がやや低く,  $RMSEA$  も .10 を越えており, この解は今後検討の必要があるといえる。

2つの潜在変数と観測変数との関係を確認しよう。{大学1年生初期過剰適応傾向} では4観測変数すべてが正の係数を示したが, {現時点での大学における居場所感覚} では否定的状態を表す「II. 自己疎外感」に対する負の係数が認められた。次に, 全体的傾向を読み取ると, 次のことがいえる。大学入学初期の過剰適応傾向は, 大学での肯定的な居場所感覚の形成を妨げるとともに, 自尊心も低下させる。大学での居場所感覚の形成は自尊心を促進した。ただし, 係数の大きさは, 「過剰適応傾向⇒居場所感覚」の影響関係はそれほど強くないことを示している。

#### IV. 考 察

本研究の中心は、大学入学初期における過剰適応傾向の働きを実証的に解明することであった。2年生以上の女子大学生に大学1年生の4~5月時点の様子を回顧させた。このために、諸井ら(2015)が石津・安保(2008)の過剰適応尺度を改変して用いた26項目を大学入学時の場面に限定した過去形表現に修正して実施した。石津・安保と同様に測定時点の過剰適応傾向を測定した諸井らの研究では、石津・安保と同様の因子構造(「自己抑制」,「期待に添う努力」,「人からよく思われたい欲求」,「他者配慮」)が得られた。しかし、今回の大学1年次初期における過剰適応傾向尺度に関して因子分析を行ったところ、異なる4因子構造が現れた。「Ⅱ. 同輩からよく思われたい欲求」は、もともとの「人からよく思われたい欲求」の側面に対応しており、まわりの他者からの賞賛を気にするかどうかは初期適応時か初期適応を一応終えた時点にかかわらず頑健に生じることになる。ところが他の3因子の側面は、石津・安保や諸井らが認めたものとは以下のように異なっていた。「Ⅰ. 忍耐・自己抑制」は、初期適応を終えた時点では弁別されていた「自己抑制」と「他者配慮」の側面が合体している。初期適応時には、適応に関する期待水準が上昇しがちになりその分適応に伴うストレスが高まり、自分の内面の心理的状态と新環境で出会う人々に対する配慮が混然一体となると解釈できる。桑山(2003)は、北村(1965)の内的適応と外的適応の区別に基づき、過剰適応とは、外的適応の過剰さによって内的適応が不全状態に陥ると考えた。初期適応時の回顧に基づく本研究の結果によれば、初期的適応時には新たな環境でいわゆる「よい子」になるために外的適応に内的適応が引きずられ、もともとの2面性が一過的に消失するのかもしれない。

また、もともとの尺度では「期待に沿う努力」として期待の源泉による区別はなかった。しかし、本研究ではヨコとタテの関係性による分離が生じた(「Ⅲ. 同輩からの期待」,「Ⅳ. 権威者からの期待」)。新たに環境に適応するには当該環境に関わる人物と自分との地位関係性が顕在化し、それぞれの水準を源泉とする期待の区別に迫られるが、初期適応を経た時点になるとこの区別が希薄となるのかもしれない。

しかしながら、以上に述べたような過剰適応傾向に関する因子構造上の差異は、本研究の場合にはあくまでも

初期適応を終えた回答者を対象に入学4~5月頃の状態の回顧に基づいている。初期適応時の実際の経験と回顧との間のずれが原因で因子構造上の差異が生じている可能性もある。例えば、本研究で得られた「Ⅰ. 忍耐・自己抑制」の側面は初期適応に対する回顧過程の中で記憶が混然一体となるのであり、初期適応時には「自己抑制」と「他者配慮」の2側面は弁別されているのかもしれない。過剰適応傾向に関する因子構造上の差異については今後も検討する必要がある。

ところで、本研究では、先行研究(岸・諸井, 2011; 諸井ら, 2015)で認められた5因子解がほぼ再現された。したがって、測定時点で形成された居場所感覚の基本的構造は頑健であると結論できる。

諸井ら(2015)による知見を踏まえ、大学入学初期に生起する過剰適応傾向、その後の大学生活における居場所感覚の形成、および自尊心の維持・高揚の関係に関する仮説(仮説Ⅰ-a, Ⅱ-b)を共分散構造分析によって検証した。最終的に到達したモデルによると、諸井ら(2015)と同様な構図が得られた。つまり、仮説Ⅰ-aは棄却され、仮説Ⅱ-bは支持された。つまり、大学入学初期の過剰適応傾向は、大学での肯定的な居場所感覚の形成を妨げるとともに、自尊心も低下させる。つまり、仮説Ⅰ-aは棄却され逆の関係が得られた。一方、仮説Ⅱ-bは支持され、大学での居場所感覚の形成は自尊心を促進した。もちろん、先述したように、この最終モデルは、GFIでは.90を上回っているが、AGFIやRMSEAで若干検討の余地がある。しかし、初期適応時の過剰適応傾向が後々の居場所感覚や自尊心に悪影響を与えるとこの結果は、諸井ら(2015)で得られた初期適応を終えた頃の過剰適応傾向の有害性とも併せると新たな環境へ適応時の意識や行動が臨床的にも重要であることを示しているといえよう。

本研究で対象とした女子大学は、先述したように立地や規模の異なる2キャンパスから構成されている。そこで、諸井ら(2015)に従いキャンパスの効果を再び検討した。その際、回答者の学年も独立変数として組み入れ、3つの仮説(仮説Ⅱ-a, b, c)を設けた。現時点での大学における居場所感覚のうち「Ⅳ. 自己没入感」と「Ⅲ. 被受容感」でのみ、有意な効果があった。「Ⅳ. 自己没入感」では3年生のほうが2年生よりも高かった。これは、学年が進行すると大学の中に没入できる事柄を見つける可能性が高くなることを示している。しかし、居場所感覚の他の側面で有意な学年差が見られないことから、2年と3年というほぼ初期適応を終えた時期にな

ぜ「自己没入感」という側面だけに学年差が生じるのかを今後検討すべきである。

さらに、「Ⅲ. 被受容感」では有意な交互作用効果が認められ、3年生では今出川キャンパスのほうが京田辺キャンパスよりも高かったが、2年生の場合には有意差がなかった。これは、適応期間が長くなると、より規模の小さいキャンパスでの生活のほうがまわりの人々から受容されている感覚をもつことを示している。これは、もともと予想したキャンパス規模の効果に一致する。新たな環境での生活期間が長くなるとキャンパスが小さいほうが良好な影響が出現することになるが、居場所感覚全般でなく、なぜ、この「被受容感」の側面に限定される原因を明らかにする必要があるだろう。

ところで、Barker & Gump (1964) は、生態学的心理学の観点から、カンザス州内にある13の公立高校を対象に小規模校と大規模校(35名~2287名)の生徒の行動を観察した。その結果、小規模校のほうが教育上適切と判断される様々な行動側面が見いだされた。つまり、「小さな学校の生徒が、学校の種々の行動場面においていっそう積極的な役割を担わせるように働く日常的な魅力や義務、外部的圧力などの下で生活を送っている」(Barker & Gump, 1964)と結論された。わが国でもこの学校規模の大きさについては問題とされ、須田(2005)は、小学校の規模が児童の生活意識におよぼす影響を質問紙調査によって明らかにし、学校規模が教師への肯定的評価、向学校性や、自己肯定感に負の影響を与えることを見いだした。前研究(諸井ら, 2015)や本研究でのキャンパスの効果に関する検討は、Barker & Gumpらの着想に由来するが、大学では履修や課外活動での自由裁量はかなり大きく、キャンパス規模による差異が生じにくいかもしれない。いずれにせよ、Barker & Gumpが用いた生態学的分析も参考にしながら、もっと精緻に分析する必要がある。

以上に述べたように、大学入学初期における過剰適応傾向の働きの実証的解明を目的とした本研究は、一定の成果を示した。しかし、先述したように、大学への初期適応を一応終えた時点と考えられる2年次以上の回答者を対象としたために、記憶の歪みの問題が結果解釈の妨げとなった。今後、初期適応時のある者を対象として過剰適応傾向の働きを明らかにする研究が必要といえよう。

〈付記〉

(1) 本研究は、第1著者の湯之上葵(生活科学研究科生活デザ

イン専攻2014年度修了)が第2著者の指導の下で作成した修士論文のために収集したデータに基づいている。

(2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 22.0.0.1 for Windows および Amos 22.0.0 for Windows を利用した。

引用文献

Barker, R. G., and Gump, P. V. 1964 *Big school, small school*. Stanford University Press. 安藤延男(監訳)『大きな学校, 小さな学校-学校規模の生態的心理学-』1982 新曜社

岸可奈子・諸井克英 2011 女子大学生における居場所感覚-大学と家庭という心理的空間- 同志社女子大学生生活科学, 45, 20-28.

北村晴朗 1965『適応の心理』誠信書房

桑山久仁子 2003 外界への過剰適応に関する一考察-欲求不満場面における感情表現の仕方がかりにして- 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 481-493.

Leary, M. R., & Baumeister, R. F. 2000 The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, 32, 1-62.

諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, 25(2), 115-125.

諸井克英 1991 生活事態変化に伴う孤独感 人文論集(静岡大学人文学部), 41, 29-63.

諸井克英 1995 成人女性における電話による社会的支援と心理学的健康 社会心理学研究, 11, 51-62.

諸井克英・坂上 舞・野島 彩・岡本有美子 2015 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索-過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心との関連- 総合文化研究所紀要(同志社女子大学), 32, 71-83.

石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, 56, 23-31.

Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. Basic Books.

須田康之 2005 学校規模別にみた日常的教育活動の実態-児童の学校生活意識に着目して- 北海道教育大学紀要(教育科学篇), 56(1), 31-45.

(2016年11月14日受理)

付表 1 諸測定間の関係—ピアソン相関値—

	a-I	a-II	a-III	a-IV	b-I	b-II	b-III	b-IV	b-V	c
[大学1年次初期における過剰適応傾向]										
I. 忍耐・自己抑制	a-I	**** .57 a	.42 a	.34 a	-.34 a	.44 a	-.30 a	-.15 c	-.17 b	-.37 a
II. 同輩からよく思われたい欲求	a-II	****	.56 a	.28 a	-.01	.09	.02	.05	.04	-.19 a
III. 同輩からの期待	a-III		****	.43 a	.08	.11	.10	.07	.19 a	-.09
IV. 権威者からの期待	a-IV			****	-.01	.20 a	.01	.02	.15 c	-.12 c
-----										
[現時点での大学における居場所感覚]										
I. 精神的安定感	b-I				****	-.70 a	.76 a	.64 a	.56 a	.37 a
II. 自己疎外感	b-II					****	-.70 a	-.57 a	-.43 a	-.46 a
III. 被受容感	b-III						****	.51 a	.67 a	.33 a
IV. 自己没入感	b-IV							****	.43 a	.39 a
V. 自己有用感	b-V								****	.39 a
-----										
現時点での自尊心	c									****

N = 286

a:  $p < .001$ ; b:  $p < .01$ ; c:  $p < .05$

付表 2 大学1年次初期における過剰適応傾向尺度における残余項目

over_a_1	大学に来ると、私は、まわりの人たちがどんな気持ちか考えることが多かった。
over_a_5	大学の中では、私は、自分が少し困っても、まわりの人たちのために何かしてあげることが多かった。
over_c_4	大学にいるときには、私は、まわりの人たちの役に立ちたいと思った。
over_c_5	大学にいるときには、私は、自分の価値がなくなってしまうのではないかと心配になり、がむしゃらに頑張った。